

# 釜石市唐丹町における震災復興の歩み

特記なき写真はすべて筆者撮影

**神田 順**

東日本大震災は、福島原発の電源喪失による広域放射能汚染と、中小都市の市街地や漁村集落でその被災の様相を大きく異なる。筆者は、岩手県釜石市唐丹町小白浜地区における震災復興にかかわることで、建築の専門家として何かできるのではないかと、今日まで活動している。その経緯を記することで、復興の検証の一端に供すればと思う。

釜石湾の南に位置する唐丹湾には、北から花露辺、本郷、小白浜、片岸、荒川、大石と6の漁港の集落があり、明治、昭和、平成の大津波のたびに被災している。昭和30年頃の人口は4,000人ほどであったが、今は約2,000人に減少している。明治三陸津波(1896年)のときに、村長の柴琢治(1865-1947)が国有林の木を伐って復興に向か大活躍をしたという話が伝わっている。三陸の漁村集落の数は400とも600とも言われているが、リアス式海岸で山が迫っており、津波のときにはすぐ裏山に避難して人命の損失は少なかったものの、漁船や養殖施設、低地に建てられた住家の損害は、経済的に厳しいものであった。それでも、大槌町や陸前高田、さらには石巻のような標高の低いところに展開していた市街地の被災は多くの人的被

害も伴うもので、まちとしてのダメージの大きさは想像を絶する。まして、東京電力の福島第1原子力発電所の水素爆発による放射能汚染については、全く別の種類の復興の困難さを抱えているが、ここでは触れない。

まちの中心を通るシキッチ通りは、昭和三陸津波の後に敷地の整備と併せて道路がつくられそのように呼ばれている。盛岩寺は、シキッチ通りの山側であるが、津波により鐘楼は倒され、庫裏は大きく破損したが、すぐに寄付が集められ木村忠一氏(2017年没)の手により、早々に改築された。寺が唐丹のまちの生活の拠り所になっている証のようである。

## 防潮堤のこと

小白浜には12.5mの防潮堤が1990年に建設されていたが、3月11日の津波は2度にわたり越流し、100戸を超える家を飲み込んだ。また、中央部分の5ブロックほどは、水路があったことから内側に転倒してしまった。比較的早い時点で、岩手県からは14.5mという数字が現れて、小白浜の場合も2mかさ上げする案で進めることになった。

かさ上げをすれば海の見える範囲が狭まることと、2mのかさ上げで防げる被害は少ないことから、筆者はかさ上げでなく原形復帰でよいのではないかと、市長宛てに意見を提出したり、地域の集まりで発言したりましたが、「一度了承したのだから、早く工事を進める」という意見に押されて、検討されることなく、かさ上げされた防潮堤は2021年に完成した。

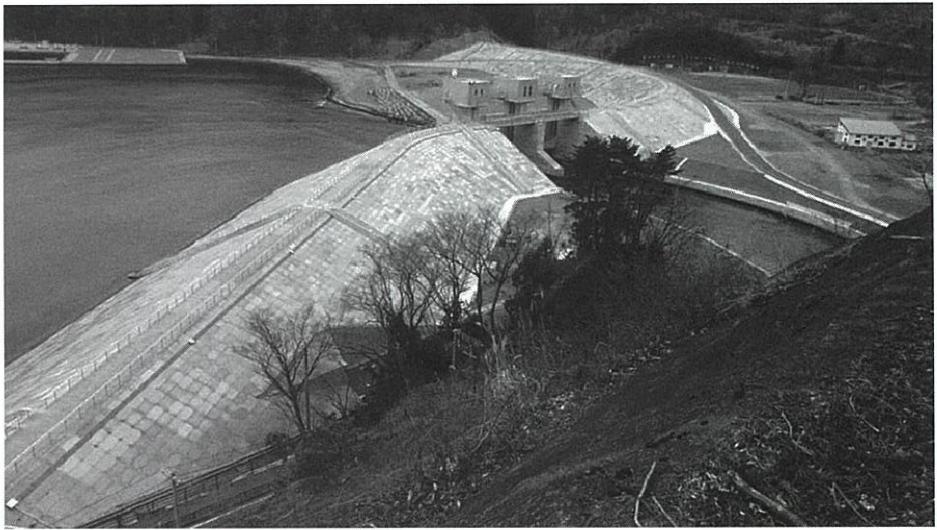
片岸地区の防潮堤は、先行して2019年に完成、片岸川の河口ということから水門が付いた緩傾斜の防潮堤で、車道が側面から上って越えられるようになっており、また何か所か階段もついて、水面まで降りられるようになっている。小白浜地区の防潮堤は、以前は防潮堤の上も下も車の走行が可能な形であったが、2mかさ上げされたことにより、中央と北側



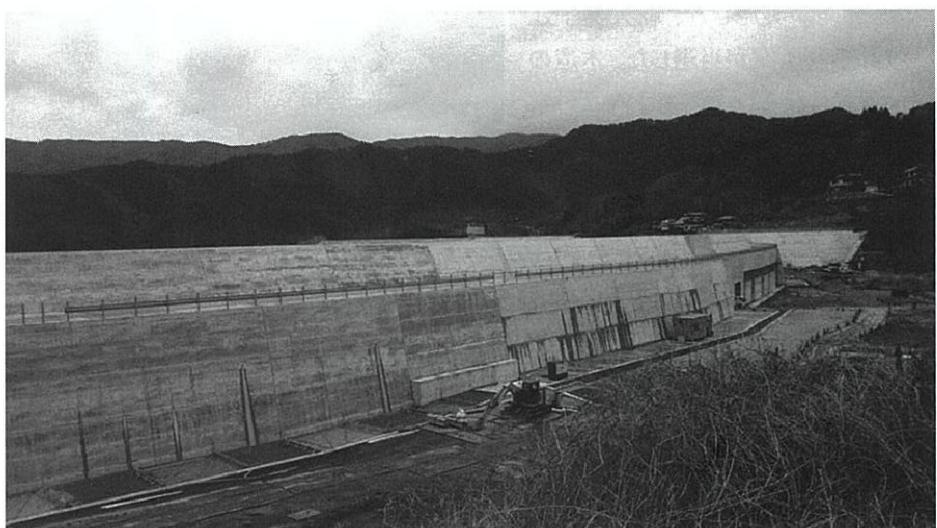
シキッチ通りの山側にある盛岩寺。津波により鐘楼は倒され、庫裏は大きく破損したが、寄付によって早々に改築された

こうに閑門を設けて行き来ができるようにしたほか、通りの面よりも高くなつたことから道路に非常時にはフラップが跳ね上がる構造の門が設置された。

防潮堤の最適高さを議論するにあたっては、防潮堤建設によって防ぐことのできる損害額の期待値と建設費の大小で論じることができる。陸前高田のように大規模な市街地を対象とするところでは意味があるが、小白浜のような低地の面積の小さなところでは、建設することの意味がないという結論になる。このことについては、建築学会大会でも論文梗概を発表し、また、国際学術誌にも投稿している。まち全体の復興計画をどのように進めるかの議論がまずあって、次に防潮堤建設の是非が検討されるべきであるが、多くの場合、市の職員の主体的な判断もないままに、県の職員も「国が、例えば14.5m程度よいのでは、と言っているから、いいですね」というような町会役員への震災直後の説明で、建設することが了解されたというような進め方は、復興予算の使い方としても問題があるように思う。



片岸の防潮堤を伝城と呼ばれる高台から見下ろしたところ(2020年3月)



ほぼ完成した小白浜の防潮堤で、転倒していない既存部分はそのまま活用している(2020年3月)

## 仮設住宅・震災復興住宅の建設と小中学校の改築

震災直後に国道沿いの山側の土地が提供され仮設団地が建設され、復興住宅が完成するまで供用された。復興住宅としては、2013年1月にプロポーザルが実施され、筆者らも入江三宅設計事務所と共同で参画したが選に漏

れた。工事にあたっては入札不調で、積水ハウスによるデザインビルとなつたのは残念である。もっとも、プロポーザル時点の設計の考え方はある程度考慮されたようである。27戸の集合住宅は、公民館施設を1階に配置したもので、他に3戸の戸建て平屋も建設された。戸数の設定

などは、希望者の事前調査などから決められたものであるが、シキチ通に面しており、高齢者にとっても暮らしやすい環境となっている。というもの、津波以前は、旅館や居酒屋、雑貨店などもあったのが、お店としては、理容店と2軒の美容室に菓子屋があるのみで、取次のクリーニング店も1年ほど前に閉店し、食料品などの買い物に関しては、車で10分の平田か、多くの人はさらに足を



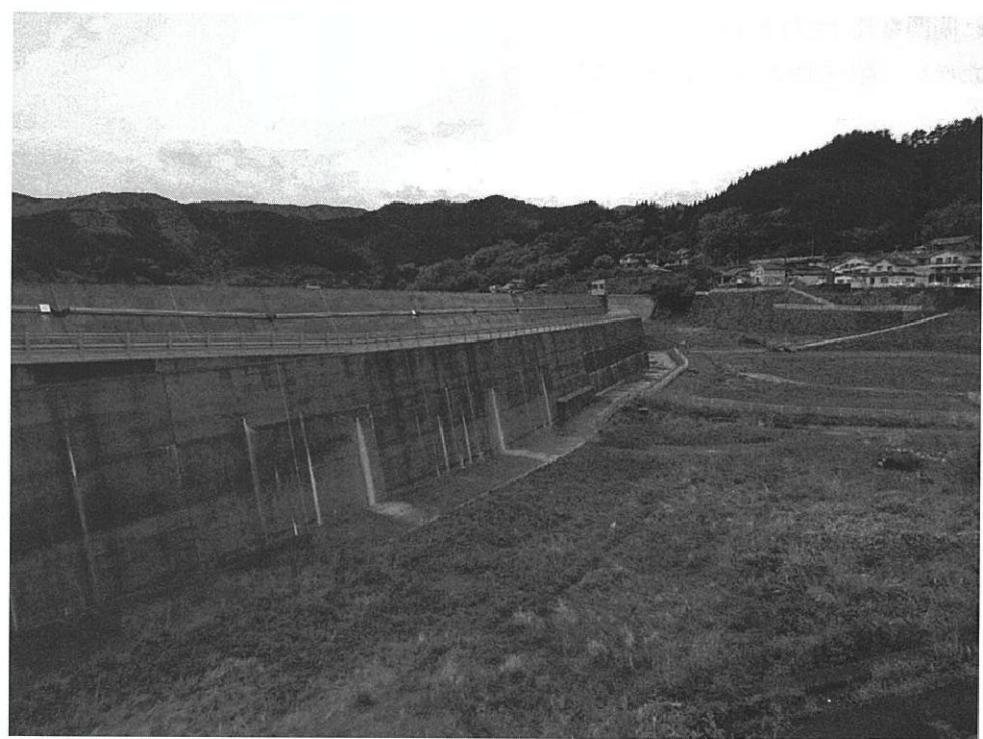
冬の小白浜漁港。環境省のみちのく潮風トレイルからの景観(2023年1月)

延ばして釜石のスーパーマーケットに出かけている。週末に遠野あたりから野菜の直売のトラックもやってくるのではあるが、利用者はかなり限定的である。食料品店やカフェがないのはまちとしては、さみしい限りである。診療所もほしい。

唐丹小学校は片岸地区にあって、津波で全壊し、中学校も耐震上の問題もあるということから、児童館・小中学校が、シキッチ通りから少し上がった国道との間の、元の中学校敷地に新築された。こちらも2013年4月にプロポーザルが実施され、乾久美子建築設計事務所案が当選した。木造の分棟形式になっていて、気持ちよい学び舎が整備された。小学校児童60人弱、中学校は20人超という規模で、まちとしては津波で減った人口がこれ以上減らないように望みたい。小白浜と片岸の子どもたちは歩いて通えるが、それ以外の子どもたちには、市が車を用意している。

### ワークショップによる意見交換会

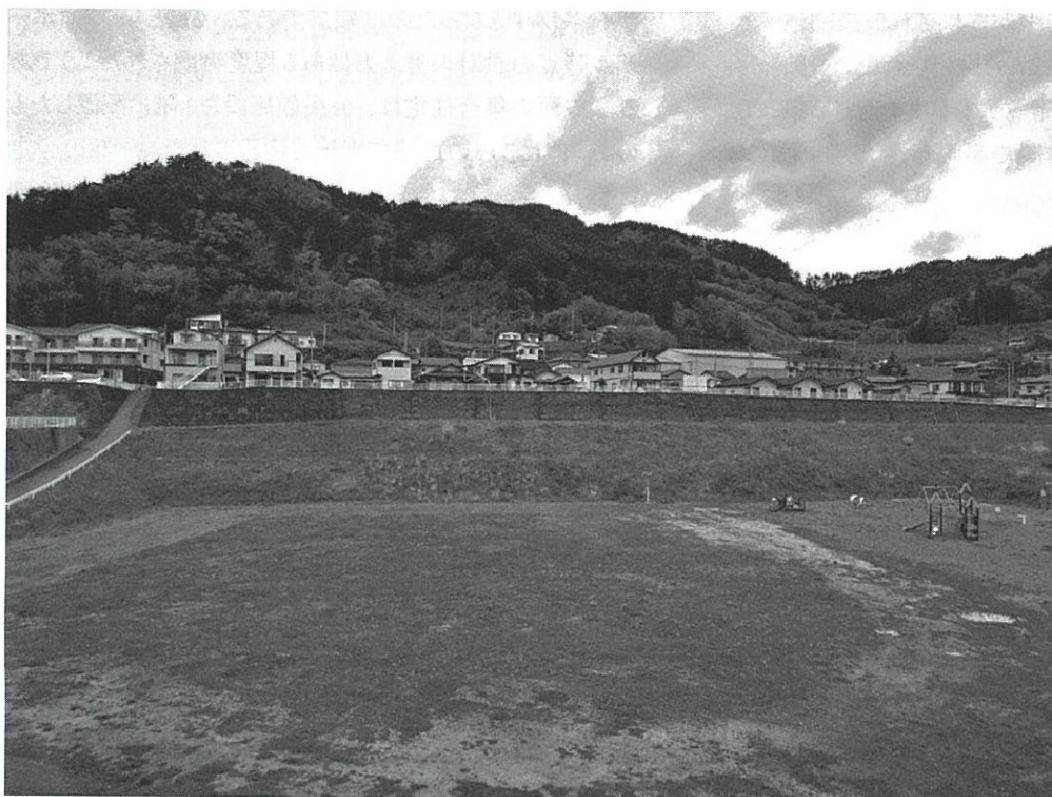
筆者が代表を務めている建築基本法制定準備会では、建築のあり方、社会制度としての問題を議論している中で、三陸の復興支援を実践しようということから、毎年、唐丹小白浜町会に協力する形で、ワークショップを開催してきている。2012年8月に第1回を開催し、1000分の1



小白浜防潮堤。低地部分は、活用ということにはなっていない(2023年4月)

の地形模型を作成し、小学生に将来の夢を描いてもらった。その後第2回(2013年10月)と第3回(2014年11月)は、シキッチ通りから下の低地部の住宅が禁止されたところの広場計画をまとめて、市に提案した。第4回(2015年11月)第5回(2016年10月)には、「まちあるき」と題したまちの紹介パンフレットを作成、第6回(2017年10月)は、三陸漁村の講演会、第7回(2018年9月)は片岸の被災地区の計画提案、第8回(2019年8月)には、三陸鉄道唐丹駅を起点としたフットパス小冊子の作成という具合である。コロナ禍で3年間は集まることができなかったが、今年は第9回とし

て子どもたちと「魅力かるた」づくりを企画している。当初は、津波後に設立されたNPOしゃくなげNetと協力体制をとっていたが、残念ながら早々に解散してしまった。日本女子大の薬袋奈美子研究室からは、先生のみでなく、毎年学生が参加してワークショップの実働隊として活躍してくれている。



小白浜の防潮堤からシキッチ通りを望む。右手に児童公園の遊具が見られる(2023年4月)

### 株式会社唐丹小白浜 まちづくりセンターの設立

まちづくりということになると、どうしても継続的な活動が必要ということから、拠点づくりを考えた。上村征也氏(2022年没)から「地元の人間より神田さんに使ってもらえばまちの

活性化が期待できるから」と、盛岡寺前の土地を提供いただき、2014年に取得した。2015年には、45人の株主を募って、(株)唐丹小白浜まちづくりセンターを立ち上げた。2017年9月には、拠点としての木造2階建ての潮見第(延床面積120 m<sup>2</sup>)を建築することができた。小白浜地区の山の斜面も杉の人工林が多く、ちょうど、シキッチ通りから小中学校を抜けて国道に出る道の整備で伐採することになる対象の杉を100 m<sup>3</sup>伐採し入手した。大船渡市の越喜来で製材し、乾燥、加工、組み立ては、山形県鶴岡市の棟梁剣持猛雄氏(2021年没)にお願いした。屋根裏部屋から、防潮堤に遮られるはするが唐丹湾が望むことができる。1階は、土間でさまざまなイベントにも利用でき、2階は、株主やワークショップ参加者の宿泊にも活用している。小規模ではあるが、唐丹の海産物の頒布を試み始めたところである。

### まちづくりということ

高齢化、過疎化は、三陸でも目立ってきており、津波被害はさらに状況を加速させた。「老人には住みにくい」とはっきり声にだす人もいる。漁業に関しては、唐丹はわかれの養殖がブランド化しており、それなりの実績となっているが、最近は鮭の孵化事業が、遡上する鮭の激減により危機的であり、ウニやアワビが現金収入をもたらすと言え、これから展開については、新しい取り組みが必要であろう。

建築にかかわってきた人間として何かできないかということで、三陸の震災復興にかかわってきていているわけであるが、現実的に必要なものとしては、診療所とか食料品店が、歩いて行ける範囲にあるとよい。

コロナ禍という大きな経験を経た日本社会を見てみると、必ずしも都心のオフィスで働くなくてもよいという意味で、唐丹町のような豊かな自然の中で仕事のできる可能性は、少し大きくなつたのではないかと感じる。大企業を誘致するという方向よりは、一人ひとりが仕事のできる環境をつくることが望まれる。「復興まちづくり」という言い方を



唐丹小・中学校・児童館。シキッチ通りから国道へ抜ける新しく整備した道路から全景がみられる(2018年10月)



潮見第竣工時 唐丹の仲間たちと  
復興釜石新聞 2017年9月23日第624号より

したときには、建築デザインや地区計画づくりでの貢献などもイメージしたのではあるが、現実にそれは、ほとんどできていない。もちろん、そのようなかかわりの機会が、今後ありうることは意識している。

地方の高齢化・過疎化社会をどうしたら持続可能社会にできるかは、わが国全体の問題でもある。しかし、三陸各地の漁業のポテンシャルは決して小

さくはない。東京で定年を迎えた人が、年間で50日くらいを唐丹で暮すだけで、どこまでまちづくりの支援になっているかと思うところもとないが、2地域居住ともなれば、それが若い人たちにも、唐丹に住む選択肢を見るようになる。新しいまちのかたちもある。東京と三陸漁村との意識的・継続的交流が震災復興まちづくりの核となることに期待している今日である。

### 参考文献

- ❖ 神田 順 釜石市唐丹の集落復興プロジェクト第一幕、東日本大震災と(復興)の生活記録、似田貝香門他編著、立花出版、2017年、p.82-114。
- ❖ Jun Kanda: Consideration for effective height of sea walls against tsunami, Structure and Infrastructure Engineering, 2015.

東京大学名誉教授。1947年岐阜県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。修士課程修了後、竹中工務店で構造設計業務に従事。1979年エдинバラ大学PhD取得。東京大学工学部教授、同大学新領域創成科学研究所教授などを歴任。2003年建築基本法制定準備会会長。2012-23年、日本大学理工学部建築学科教授